

地方の中学校と留学生の異文化接触

－ 地域に変革をもたらす交換留学生インターンシップ －

恒松 直美

はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学生向けの「グローバル化支援インターンシップ」授業の一環として、2014年4月に行った「倉橋・江田島国際交流歴史ツアー」における「広島大学短期交換留学プログラム留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会」に焦点をあて、異文化接触の体験に関する参加者の意識について考察する。国際交流会に参加した倉橋中学校生徒・教職員・保護者・交換留学生に実施したアンケート調査をもとに分析を行う。本ツアーは、「グローバル化支援インターンシップ」を受講した交換留学生インターンが、自身が所属する広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program, HUSAプログラム）¹留学生向けに留学生が地域の人々と交流し地域の歴史的・文化的資産について学ぶ目的で企画した。2012年度より交換留学生主導で進めるプロジェクト型の「グローバル化支援インターンシップ」授業を開講し、交換留学生インターンによるツアー企画は2014年度で3回目となった。2012年2月に「呉市倉橋町国際交流歴史ツアー」、2013年4月に江田島市への移住者・江田島市職員との国際交流会議を盛り込んだ「江田島国際交流歴史ツアー」を企画し、外国人が島に移住した際の支援策について話し合う国際交流の場を持った。ツアー企画の内容は教員からの助言をもとに授業で検討し決定した。

「広島大学短期交換留学プログラム留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会」企画は、交換留学生と地域の学校関係者との新しい異文化交流の場を作ることを目的とし、2014年度のツアー企画に導入した。呉市倉橋町にある倉橋学園呉市立倉橋中学校の生徒・教職員・保護者と広島大学短期交換留学プログラム留学生が一堂に会する大規模な国際交流会を異文化接触の少ない地方の中学校で成功させるためには綿密な企画と準備を必要とした。地域の人々と世界各国からの交換留学生との交流が異文化理解のきっかけとなり、その出会いが有意義なものになるよう詳細に内容を検討し進めた。本国際交流会の企画は、留学生インターンにとり、地域社会の人々と連携して企画を実行するマネジメント方法を学ぶアクティブラーニングの場となると同時に、教員にも留学生インターンのリーダーシップ育成における種々の課題を考察する機会をもたらした。

本ツアー企画に従事する留学生インターンは、学校や地域の人々と連携し、インターン間のチームワークを生かしつつ企画を実現させる体験型授業を日本の地域との関わりにおいて体験する。「社会人基礎力」²とされる「前に踏み出す力（主体性・働きかけ力・実行

力)、「考え抜く力」(課題発見力・計画力・創造力)、「チームワークで働く力」(発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力)のすべてを駆使して挑むことが求められる。その挑戦によって実現した国際交流会における異文化接触を参加者はどう受け止めたのか。本稿では、本国際交流会に参加した倉橋中学校生徒・教職員・PTA役員・保護者と広島大学短期交換留学プログラム留学生に実施したアンケート調査をもとに、国際交流会がもたらした異文化接触体験についての参加者の意識について考察する。本調査結果を「グローバル化支援インターンシップ」授業における大学の国際教育と地域の人々とを連携する方策の検討にも役立てる。

留学生インターン企画による留学生と地域の人々を結ぶ「国際交流歴史ツアー」

はじめに、2014年4月26日(土)に行った「倉橋・江田島国際交流歴史ツアー」企画における「広島大学交換留学プログラム留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会」実行までのプロセスについて述べる。本ツアー企画は、「グローバル化支援インターンシップ」を受講した交換留学生インターンが行う「グローバル化支援プロジェクト」の一つである。2013-2014年度の「グローバル化支援インターンシップ」の正式な受講生は7人で、出身国は中国(男性1人・女性3人)、韓国(男性2人)、フィリピン(男性1人)である。アメリカ出身の学生(男性1人)とポーランド出身の学生(男性1人)は、「インターンシップ・プレースメントテスト」の結果、日本語レベルが中級であることから本授業の受講が困難であると判断し、単位未取得の聴講という形で参加した。しかし、企画が進行するにつれ、聴講学生の一人が実習のリーダー的役割を果たして最後まで活躍した。2012-2013年度と同様、単位未取得の留学生インターンがリーダー的役割を果たした事例となった。

2014年4月のツアーには、国内で唯一、海上自衛隊の潜水艦と護衛艦を間近で見られる呉市昭和町にある「アレイからすこじま」公園の見学、呉市倉橋町にある「長門の造船歴史館」見学、呉市立倉橋中学校との国際交流会、江田島市沖美町における江田島市への移住者・江田島市職員との国際交流会を盛り込んだ。倉橋中学校及び江田島市移住者との国際交流会の企画は、地域社会における新しい異文化交流体験の場の構築を目指すものである。2014年度のツアー企画についてインターンの意向を尋ねた際、インターンがツアー企画を強く要望したため、第3回目となるHUSAプログラム留学生向けツアーの実行を決定した。担当教員より、ツアー企画に要する多大な時間と労力や必ず遂行する覚悟の必要性を伝えたが、インターンの意向は変わらなかった。しかし、ツアーを企画・実行する過程で仕事の多さや厳しさにより、数か月で3名のインターンが授業から去る結果となった。本授業は、学生主導型のプロジェクト型インターンシップであり、雑務や手間のかかる書類作成等の連続である。インターン間で連携を図りつつ、企画実現に向けマネジメントする力も必要となる。書類の改訂作業、遅々として進まない他のインターンとの連絡、ス

スケジュール調整など、インターンは仕事の現実的厳しさと人をマネジメントする困難を体験する。学術知を実践知に最大限に生かす努力を要する実習体験を意義ある体験として認識できるかどうか、インターンの企画成功に向けた努力の度合いを決定づける。

交換留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会企画：異質性との出会いの場の構築

2014年度の「広島大学短期交換留学プログラム留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会」は、中学校生徒・PTA 役員を含む保護者・教職員が参加する、地域では初めての大規模な国際交流会であったため、企画当初から担当教員が綿密な指導を行いつつ検討を重ねて臨んだ。企画の第一歩として、2013年12月に担当教員が留学生インターン2人と児童教育を課題研究として行っているHUSAプログラムの留学生1人の3人を連れて倉橋中学校を訪問し学校長と会議を持ち、HUSAプログラムの概要説明と国際交流会の提案を行った。職員会議での承認後、2014年2月に倉橋中学校PTA役員会に担当教員が留学生インターン3人を連れて出席し、本国際交流会の具体的実施計画について説明し協力を要請した。国際交流会開催について理解と協力を得るため、PTA役員会においてグローバル教育の意義や広島大学短期交換留学プログラムで来日する留学生について説明した。

国際交流会の内容の詳細に関しては、規模の大きさに鑑み、担当教員の国際教育の経験に基づき教員が概要を作成し授業にてインターンに提示した。160名の参加を見込む大規模な国際交流会を滞りなく進行できるよう万全を期すため、会場として使用する中学校体育館を見学し、グループの配置や移動について明確に把握しておくため、第3回目の倉橋中学校訪問を担当教員と留学生インターンとで3月に行った。留学生の入場の方法、各グループの配置、全体会で行う異文化理解ゲームでの人の配置などについて明確に把握するためには現場見学が不可欠であった。会場のスペースの仕分け、参加者の移動、各参加グループの椅子の配置、第1部と第2部の椅子の配置換えなど、詳細な検討を要した。主な懸念事項の1つは、1年から3年までの中学校全校生徒が参加する国際交流会において、世界各国からの交換留学生に対し異文化接触の少ない中学生がどう反応するかであった。この点は、学校長からの中学生の態度についての助言により教員の懸念は緩和された。もう1点は、大規模な交流会において、中学校生徒・中学校教職員・HUSAプログラム留学生の参加者が、予定通りに移動し滞りなく交流会が進行するかという点であった。

国際交流会に向けた担当教員・留学生インターンと呉市立倉橋中学校との会議・打ち合わせの流れを表1に示した。また、国際交流会の参加者の概要を表2に、国際交流会の詳細な内容は表3に示した。第1部を留学生と倉橋中学校生徒との国際交流会、第2部を留学生と保護者及び教職員との国際交流会とした。担当教員が日本語と英語で司会・進行を行い、必要に応じて英語と日本語の通訳を行い、日本語能力と英語能力が多様な多国籍のHUSA留学生と中学校関係者とのコミュニケーションが図れるよう配慮した。中学校生徒

のグループ分けは、中学校でグループ行動に使用している 8~9 名で構成する班(A~H の 8 班, 1~3 年の男女混合)のグループ名簿に基づき行った。当日は各班で円形に座るよう椅子を配置し、中学生は留学生の入場前に着座し、留学生は入場後に担当教員とインターンの指示で自由に各グループに加わった。参考として HUSA 留学生の国籍・専攻・日本語と英語のレベルの情報を事前に中学校に提示しておいた。

表 1. 国際交流会に向けた担当教員・留学生インターンと呉市立倉橋中学校との会議・打ち合わせ

呉市立倉橋中学校訪問・ 国際交流会の提案 2013年12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 担当教員と留学生インターンが倉橋中学校を訪問 ・ 倉橋学園呉市立倉橋中学校長・小学校長と会議 ・ 「広島大学短期交換留学プログラム留学生と倉橋中学校との国際交流会」の開催日を決定
呉市立倉橋中学校PTA役員会にて 国際交流会の説明・協力依頼 2014年2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 担当教員とインターン3人が倉橋中学校PTA役員会に参加
国際交流会の詳細内容を教員・留学生インターンが決定（「グローバル化支援インターンシップ」授業）	
呉市立倉橋中学校にて企画会議・ 会場確認 2014年3月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員・インターン2人・日本人支援員が倉橋中学校を訪問・企画会議 ・ 詳細内容及び国際交流会会場（中学校体育館）の確認
広島大学短期交換留学プログラム留学生と倉橋中学校との国際交流会 開催（呉市立倉橋中学校） 2014年4月26日	

表 2. 広島大学短期交換留学プログラム留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会 参加者概要

日時：2014年4月26日(土)	場所：倉橋学園呉市立倉橋中学校
1) 広島大学からの参加者	
広島大学短期交換留学プログラム留学生(25名)・広島大学国際センター教員・日本人支援員	
＊留学生の出身国: 中国, 韓国, 台湾, フィリピン, タイ, マレーシア, インドネシア, アメリカ, オーストラリア, ニュージーランド, イギリス, ポーランド, フランス, フィンランド (14カ国)	
2) 呉市立倉橋中学校からの参加者	
倉橋中学校生徒・倉橋中学校教職員・PTA 役員・保護者	
3) その他 呉市産業部観光振興課・呉市議会議員	
＊司会・進行(及び通訳): 広島大学国際センター国際教育部門 教員 ＊日本語と英語を使用	

本国際交流会の特徴は多国籍の留学生の参加がもたらす画一性のない異質性との出会いである。留学生の出身国は 14 カ国である (表 2)。HUSA プログラムの参加条件は英語又は日本語で授業の受講が可能なことであり日本語能力は初級または中級が大多数である。

専攻は日本語、日本研究、英文学、言語学、法学、国際関係、グローバル・スタディ、IT、工学、物理学、生物学、数学など多岐に渡る。HUSA プログラム留学生の特徴は文化的背景・言語能力・専攻の多様性である。国際交流会での意見の表明や質疑応答は、各留学生が英語または日本語で伝え、教員が通訳する形式で進行させた。担当教員の英語と日本語による司会に加え、可能な場合は留学生にも通訳をさせる場も作り、異文化間コミュニケーションでは臨機応変に対応することが大切であることを参加者が観察できるよう努めた。

表 3. 広島大学短期交換留学プログラム留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会 内容

<p>第 1 部 広島大学交換留学生と呉市立倉橋中学校生徒との国際交流会 (13:30-14:20)</p> <p>1) 広島大学短期交換留学プログラム 担当教員 恒松直美 ご挨拶 (13:00-13:05) 入場・グループ構成 *約 10 名(中学生 8 名+留学生 2 名)x10 グループ=約 100 人</p> <p>2) 倉橋中学校生徒会による倉橋紹介 (13:05-13:25)</p> <p>3) 留学生インターンの日本留学の体験 スピーチ(日本語)(全体) (13:35-13:50) 1. 留学生インターン (韓国出身) *プロジェクト・リーダー 2. 留学生インターン (ポーランド出身) *留学生が日本でびっくりしたこと・カルチャーショックなどについて日本語でスピーチ 質疑応答 *担当教員による日本語・英語通訳 *倉橋中学校の生徒より留学生や留学生の国についてきいてみたいこと</p> <p>4) 異文化理解ゲーム(グループ・全体) (13:50-14:15) A. 自己紹介・質疑応答 1) 各グループで自己紹介 2) 自己紹介内容について司会者が質疑応答(英語と日本語) 3) 中学生から留学生に英語で質問(好きなシンガー, 言葉など) 4) 司会者が質疑応答(英語と日本語) B. 伝言ゲーム:日本語と英語 (全体) 1~2 グループ(各グループ 6~7 人, 中学生と留学生混合)</p> <p>5) 国際交流会 終了のご挨拶 恒松 (14:15-14:20) *保護者 授業参観</p>
<p>第 2 部 広島大学交換留学生と呉市立倉橋中学校教職員・PTA 役員・保護者との国際交流会 (14:30-14:50)</p> <p>1) 広島大学短期交換留学プログラム 担当教員 恒松直美 ご挨拶 (14:30-14:35)</p> <p>2) 留学生インターンの日本留学の体験 スピーチ(日本語)(全体) (14:35-14:50) 1. 留学生インターン (韓国出身) 2. 留学生インターン (中国出身) 質疑応答 *担当教員による日本語・英語通訳</p>

国際交流会に関するアンケート調査結果：画一性のない複数の「異文化」との接触体験

国際交流会に関するアンケート調査票と HUSA プログラムの参考資料を参加者である倉橋中学校の生徒・教職員・PTA 役員・保護者・HUSA 留学生に交流会開始時に配布し、交流会終了時に一部回収した。未回収のアンケート調査票は、倉橋中学校より後日送付していただいた。国際交流会の参加者の人数とアンケート回答者数の概要を以下に示した。当日欠席者が出たり、遅れて到着する保護者も多くいたため概数として提示した。

国際交流会の参加者数とアンケート調査回答者数（参加者数合計約 160 名・回答者数 133 名）

1) 広島大学からの参加者 [広島大学 留学生・ボランティア学生 回答者数 合計 27]

広島大学短期交換留学プログラム留学生(25 名)

広島大学日本人ボランティア学生(3 名)

* 広島大学国際センター教員(1 名) * 司会・進行を担当

2) 呉市立倉橋中学校からの参加者

倉橋中学校生徒(約 80 名) [回答者 76]

倉橋中学校教職員(約 10 名) [回答者 4]

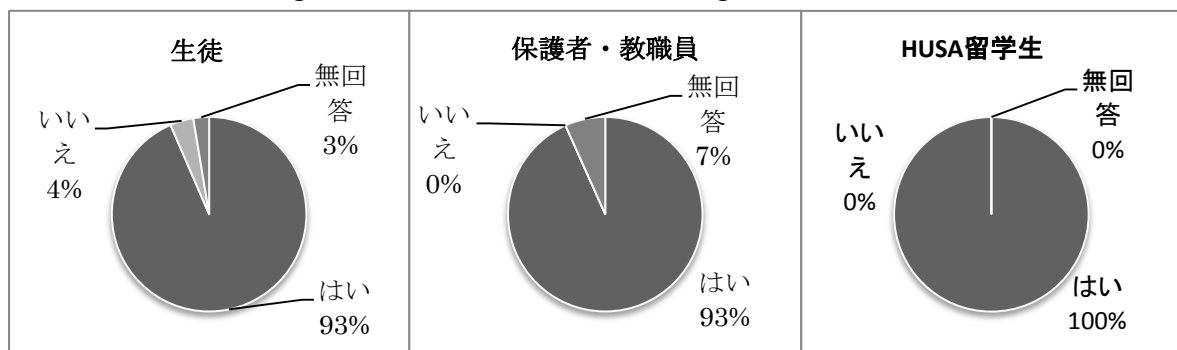
PTA 役員・保護者(約 40~50 名) [回答者 26]

3) その他 呉市産業部観光振興課 (1 名) 呉市議会議員 (1 名)

* 参加者数を()内、アンケート回答者数を[]内に提示した。

次に、アンケート調査の集計結果について考察する。調査結果のデータを、1.「生徒」(倉橋中学校生徒)、2.「保護者・教職員」(倉橋中学校生徒の保護者及び倉橋中学校教職員)、3.「HUSA 留学生」(広島大学短期交換留学プログラム留学生)について左から提示した。HUSA 留学生は、大多数が英語の表記なしには質問の理解が困難なため、アンケート調査票に質問を日本語と英語で表記した。各質問の内容と回答の集計結果を以下に提示する。

1. 国際交流会に参加してよかったですか。 HUSA Students: Have you enjoyed the 'International Exchange Event' with Kurahashi Junior High School Students?

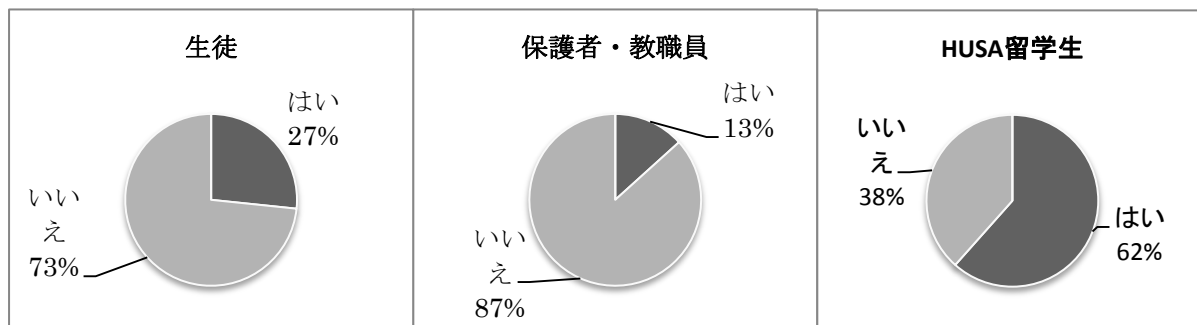


生徒・保護者・教職員の大多数が国際交流会への参加を好意的に捉えている。HUSA

留学生は全員が参加して良かったと回答している。

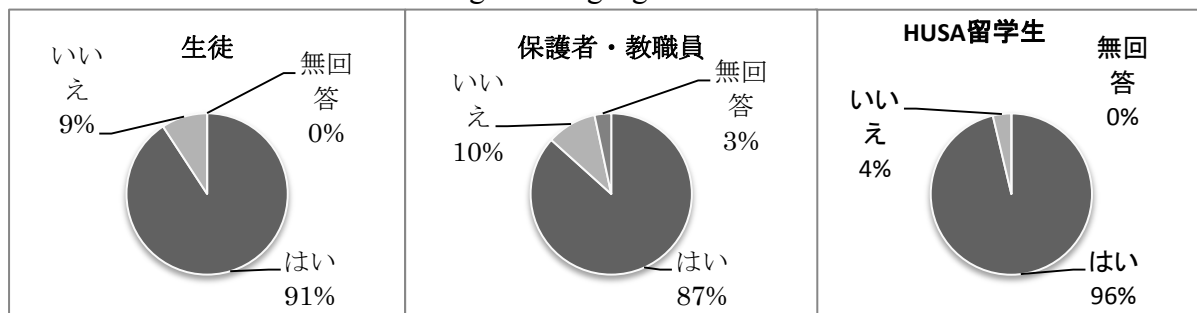
2. これまで外国人との国際交流会に参加されたことがありますか。

HUSA Students: Have you ever participated in ‘international exchange meeting’ with local school?



「国際交流会」の解釈にもよるが、国際交流の経験は生徒・保護者・教職員とも少ない。外国人教員と話した体験を生徒が「国際交流」と認識した可能性もあり、体験の種類が把握できる質問設定が必要となる。HUSA 留学生は 60%以上が国際交流会の参加経験ありと回答しているが、来日後の大学でのオリエンテーション後の懇親会を含めている可能性もあり、今後の調査では国際交流会の主旨により種類を峻別する質問設定が必要となる。

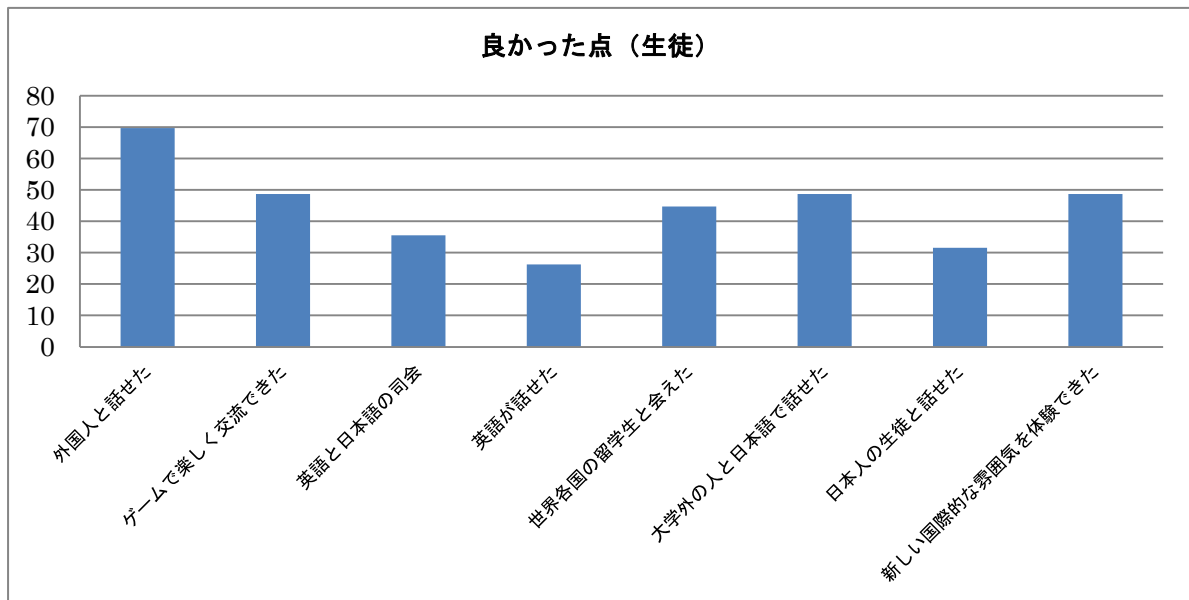
3. このような国際交流会にまた参加したいですか？ HUSA Students: Do you want to participate in this kind of ‘international exchange meeting’ again?



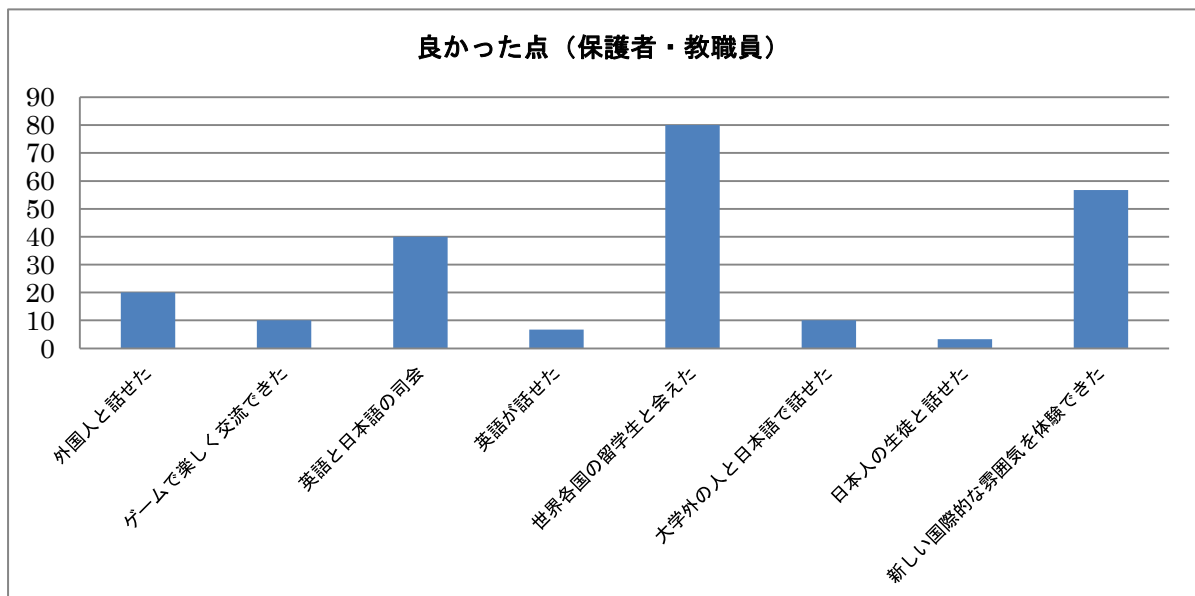
大多数が国際交流の機会を希望しているが、「いいえ」と回答した人の理由を探ることが異文化接触における検討課題を知る鍵となる。本国際交流会は、外国人と接した経験や公式の場で発言することに慣れていない保護者にはいくつかの不安要因があったと思われる。大規模な国際交流会において各留学生の言語能力に応じて英語と日本語で発言が飛び交い、大学教員が英語と日本語で司会・進行及び通訳を行う国際会議形式の交流会は、異文化接触経験を持たない保護者にはあまりに斬新な体験である。留学生への接し方に戸惑う参加者が多くいた現実、世界各国の留学生と出会う体験が地域の学校現場では非日常的体験であることを示しており、グローバル化の時代において学校の教育現場や地域社会でどう異文化間教育を発展させていくべきかが今後の課題であることを示している。

4. 今回の「広島大学の交換留学生と倉橋中学校の国際交流会」で良かった点を下の中から選んで下さい。

Please select good points of today's international exchange meeting with local school.

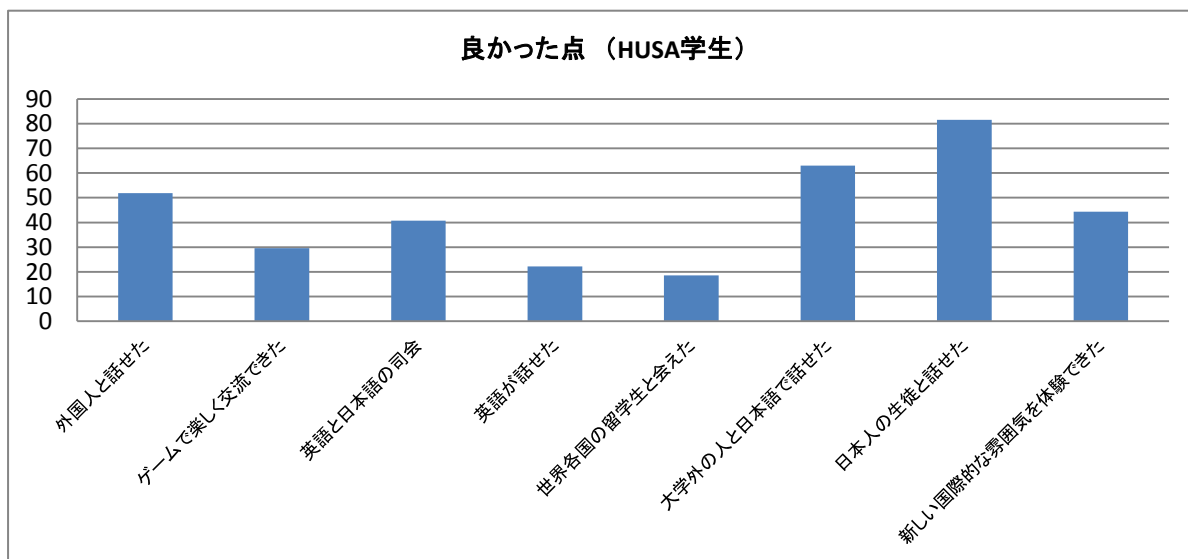


中学校生徒では、良かった点として「外国人と話せた」が一番多いことから外国人と身近に話す機会を求めていることが分かる。14カ国出身の25名の留学生と一堂に会し、画一的でない多種多様な異文化を同時に見ることのできた国際的体験が新鮮であったことが伺える。中学生と留学生との協同による伝言ゲームでは、勇気を出して前に出てきた生徒が、恥ずかしそうにしながらも留学生とコミュニケーションをとろうと努力する姿があった。



保護者・教職員からは、「世界各国の留学生と会えた」ことについての評価が高い。北米・ヨーロッパ・アジア・オセアニアの幅広い文化の多様性を持つ多国籍の留学生に会うことのできた本国際交流会は地方の学校では稀有な体験であり、大学と連携した異文化接触の

体験を学校教育の現場で持てたことを評価している。日本語のみでのコミュニケーションが困難な状況において、担当教員が英語と日本語で司会・進行を行い、ファシリテーター的役割を担ったことや、国際的な雰囲気を経験できたことも評価している。



交換留学生は、「日本人の生徒と話せた」ことや「大学外の人と日本語で話せた」ことを評価している。大学内と大学周辺に活動やインタラクションの場が限られる中、平素接することのない中学校生徒との国際交流は興味深かったと話す留学生もいた。日本留学中に大学外の人と日本語で話す体験を持てたことを貴重な国際的体験として評価している。

次に、国際交流会参加者の自由記述の内容について考察する。倉橋中学校生徒・教職員及び保護者・HUSA 留学生に分類し、記述内容を要点ごとに分類して考察した。

自由記述 1. 倉橋中学校生徒

外国人と交流したことの感動・喜び（情動）

- ◆ 一生に一回くらいの経験をできたことに感動した。そして、たくさん前に出て伝言ゲームをできたことが嬉しかった。
- ◆ とても楽しい時間を過ごすことができました。Sさん（留学生）の話に感動しました。また会いたいです。Sさんともっと話したかったです。
- ◆ 外国の人と話せた。/ 外国の方々と話すことができて良かったです。
- ◆ 外国の方々とたくさん話せる機会はなかなかないと思うからとても嬉しかったです。
- ◆ 今までこんな体験をしたことがなかったので、とてもわくわくしていました。色々な国の方々と話せて良かったです。これから、たくさんの外国の方と交流したいと思います。ありがとうございました。
- ◆ G班で2人の留学生が来られてとても良かったです。

カルチュラル・アウェアネス（文化の多様性・言語に関する気づき）

- ◆ 今日は国際交流会でした。アメリカやカナダの人だけが来るのかと思っていたら、ポーランド

や台湾、韓国、中国、フランス、イギリスなどいろんな国の人が来て、びっくりしました。最初は恥ずかしくてあまり話せなかったけど、だんだん話せるようになりました。

- ◆ 留学生の人は日本語がとても上手でした。
- ◆ 今回の機会は日本語が上手な人が多くて予想外でした。

異文化コミュニケーション（言語能力・対話能力などの状況調整能力）

A. 自身の対話能力に関するポジティブな評価（コミュニケーション・対人関係）

- ◆ 英語が話せたのでよかったな、と思いました。
- ◆ 絶対英語じゃないといけないってことがなかったから、自分の伝えたいことを伝えられて嬉しかった。
- ◆ 日本語がほとんど話せない人も一生懸命に話してくれたので、私も英語を頑張りました。そうしたら、“Thank you”と言ってくれて嬉しかったです。私は英語が大好きで、特に外国の人と話すことが好きなので、こんな機会があると積極的に参加していきたいです。
- ◆ 伝言ゲームは発音が良すぎて、“with”が“in”に聞こえて、私から「ヤンさんの中で (in Yang-san)」という文に変わっていきました。伝言ゲームでできあがった文章はとてもおもしろかったです。質問タイムでたくさんコミュニケーションがとれました

B. 自身の対話能力欠如についての反省

- ◆ 最初に自己紹介などがありました。あまり話せなくて残念でした。
- ◆ 私は、Dグループでやりました。もっと会話できたのに積極的に会話できなくて後悔中です。

異文化接触体験を持つ要望（外国文化への興味の喚起・オープンネス）

- ◆ 最初は恥ずかしくてなかなか話せなかったけど、後から楽しく話せるようになりました。でも、もう30~60分あったら、もっと深く親しめていたと思います。また交流したいです。
- ◆ 最初は緊張してたけど、だんだん馴染めました。とても楽しかったので、また機会があると参加したいです。ものすごく楽しかった。
- ◆ とても貴重な体験をしました。もっと交流を深めたいです。別れるのが寂しかったです。
- ◆ とても楽しかったです。もう少し話したかったなというぐらい。またしたいです。
- ◆ 色々な外国人の人を見て嬉しかったです。来年も来て欲しいです。
- ◆ 初めの自己紹介の時、みんな緊張していたけど、だんだんほぐれました。私も隣に座っていた方とたくさん話せました。でも、1時間だけだったからもっと話したかったと思いました。また、機会があれば体験してみたいです。
- ◆ また、こんな機会があるとたくさん英語を話したいです。すごく楽しくて良い経験でした。

その他の意見・感想

- ◆ 貴重な体験ができ、良い思い出になりました。/ 貴重な体験をありがとうございました。

本国際交流会での異文化接触の体験により異文化間能力が形成されつつあることが分かる。加藤(2009: 13)は、異文化接触場面において必要になる心理的要素やコミュニケーション力などの能力を総称して「異文化間能力」と呼ぶと定義している。中学校生徒が留学生

と接触し、実際にどう対応し、自身の異文化間能力をどう受け止めたのかが読み取れる。加藤(2009: 14)の解説する「異文化対処力の要素」の図(山岸 1995)で提示された「カルチュラル・アウェアネス」・「状況調整能力」・「自己調整能力」は、中学校生徒自身が留学生との接触により自己省察した項目と重なる。中学生の異文化接触の研究に、藩・義永(2014)による、異文化認識とその関連要因に関する日本人の中学校生徒と他国の中学校生徒との比較研究がある。中学生の日常生活で起こり得る異文化接触場面を想定し、予測する行動に関するアンケート調査であるのに対し、筆者の調査は、中学生が日常からは想定不可能な画一的でない多種の異文化性との実際の接触に関する意識調査である。想定外であった文化と言語の多様性に触れた中学生の新しい発見が読み取れる。

溝上・柴田(2009)は、「国際理解教育」において、「国際理解」・「外国語会話」・「英会話」がほぼ同義に理解されたケースが大多数であった現実を指摘する。本国際交流会の企画において、「国際交流」という言葉から、参加した中学校生徒は自動的に欧米からの留学生と英語でのコミュニケーションを想定していたことが分かる。文化・言語の多様性を持つ複数の異文化性と同時に遭遇する体験は、「国際」や「外国人」の意味が包含する国際社会における文化の多様性を現実として認識し、その意味のフレームワークを再構築する体験となったと考える。日本に留学する世界各国の留学生の日本語能力と英語能力が多種多様である現実、日本語の得意な留学生の文化的背景の多様性など、「外国人」の多様性と複雑性を現実的に知る体験は、「外国人」や「国際」という用語に対する固定概念をも再考させたと考える。生徒が世界各国の留学生との交流を稀で貴重な体験であると捉えていることから、異文化接触の少なさと未知の世界への渴望も見て取れる。日常生活で自発的に異文化接触を持つことは稀である現実を踏まえ、意図的に異文化接触の場を設定した教育現場を構築することが異文化間コミュニケーション能力をつけることにつながる。

Sobre-Deton・Carlsen・Gruel(2014)は、特権を持たないコミュニティーのグローバルコンピテンシーのための教授法の研究で、草の根レベルでの異文化コミュニケーション力改善の重要性(Appiah 2006)や、現在の状況がかつて隔離されていた集団の距離を縮め、新しい現実や新しい機会と対面し克服すべき挑戦をもたらしている(Waks 2009)ことに触れ、グローバル社会では特権を持つか否かに関わらず、異文化の人と隣り合わせで仕事をし、接触する可能性を誰もが持つことを述べている。生徒の「一生に一回くらいの経験ができたことに感動した」という記述には、世界各国の交換留学生との出会いを非日常的な感動体験として捉えていることが表れているが、異文化性との共存は自分たちの日常となりつつある現実を学ぶ場を地域の教育現場で構築することが今後は不可欠となる。

Hibbins and Borbasi(2013: 525)は、Pedersen (2010)の述べる、留学のみでは異文化理解の有効性は促進されず、異文化理解に関する教授を受けることでより異文化理解が高まるとの指摘に言及し、異文化間の連携は制度的な支援なしには自然には発生しない現実について論じている。つまり、教育的な異文化接触の設定が必要なのである。交流会で韓国人留学

生のスピーチ後、韓国に関する質問を担当教員が促した際、ある生徒が挙手して英語で自己紹介し、「韓国のり」が気に入ったことを述べて会場から拍手が沸き起こった。話題を発展させるため担当教員が韓国ののりと日本ののりの違いを質問すると自らの見解を述べた。このような些細な気づきを大切にした異文化に関する気づきを語る教育現場を意図的に作ることで、生徒がカルチュラル・アウェアネスを持てるようになる。

自身の対話能力について、英語が通じた体験が肯定的評価をもたらしたケースと、対話ができなかった自分を内省するケースがあった。林原(2011: 101-102)は、小学校での国際理解教育は系統的な知識習得とは異なり、情意的領域の育成であるとの考えに基づき、児童の情意的領域に焦点をあて、小学校高学年の国際理解に関する興味・関心に影響を及ぼす要因を研究している。中学校生徒の場合も、情意的な側面の揺り動かしが生徒に影響を与えている。生きた外国人と話し、感情を揺り動かされる体験が生徒の意欲や関心に影響し、自己省察が次の目標へと駆り立てる可能性を示している。

自由記述 2. 倉橋中学校教職員・中学校生徒の保護者

カルチュラル・アウェアネス（自文化の理解）

- ◆ 遅れて来たのでゲームとかは参加できていないのですが、（日本文化を）外から見た時の話は新鮮なお話でしたので、もっと聞いてみたいと思いました。文化、食、そこに住んでいると当たり前になりすぎて、言われて初めて気づくことも楽しいと思いました。子供達とも交流を持ってもらいたい（会わせたい!!）

異文化接触体験を持つ要望（外国文化への興味の喚起）

- ◆ 時間が短い。/ ぜひこのような機会をまだまだ増やして欲しいと思います。
- ◆ 今日は、この席に出席できてとても良かったです。遠くから、ご苦労様でした。また、機会があれば出席したいです。本当にありがとうございました。
- ◆ 自分の夢に向かって頑張ってください（自分の夢に関する留学生のスピーチを聞いた感想）。
- ◆ 楽しい交流会で良かった。

国際交流会の内容に関する要望・意見（使用する教材・メソッド）

- ◆ 自己紹介とかよりも、もっとゲームの時間を取ればもっと楽しいかも。
- ◆ もっと触れ合う場面を多く設定されたらと思いました。
- ◆ もう少し時間があれば、ゲームなどで楽しく過ごすコミュニケーションがとれやすい。伝言言葉は難しいので、絵パネル、単語を使ったゲームなどはどうか（色グループなど）。

保護者が子供の国際体験を要望していることが分かる。韓国人留学生インターンのスピーチで述べられた日本と韓国の食習慣やマナーの相違に関する話により、自文化について再認識している。交流会が終わる頃には、生徒・保護者・留学生が会場で打ち解けて話す様子が見られたが、後日、「もっと話したい。交流会が短すぎる。家に宿泊して欲しい」と

口々に保護者から要望の声があったとの報告を学校関係者から受けた。異文化接触の実体験が外国文化への興味を喚起し、外国人に対するオープンな態度へと変容させている。

自由記述 3. HUSA プログラム留学生

外国人と交流したことの感動・喜び (情動)

- ◆ 文化が違って、人と人のつながりが感じられました。ありがとうございました。
- ◆ Thank you! / It was fun. Thank you all to organize it.

カルチュラル・アウェアネス (日本文化への興味)

- ◆ 日本の学校に来られて良かった。日本の中にいるように感じられた。
- ◆ It is good to come to Japanese school. Feels really in Japan.

異文化接触体験を持つ要望

- ◆ I enjoyed joining it. I want to join again.

異文化コミュニケーション (言語能力・対話能力などの状況調整能力)

- ◆ I think the program would benefit by spending a longer time with the students in a relaxed situation so we can talk on a more personal level. Also, I think may be for students who would like to practice another language a pen pal system or option might be helpful as otherwise they might not have an opportunity to talk to native speakers.
- ◆ There needs to be a less tense environment or help persuade students to respond.
- ◆ I thought the meeting with the students was OK, but I would have liked it the students talked more with us although I do understand their cultural point of view as to why they don't talk much.
- ◆ More time to speak with school children outside of event and in event. Difficult to build rapport with the games in front of everyone else just watching. Also it would be easier to participate if things were spoken in both Japanese and English.

国際交流会の内容に関する要望・意見 (異文化理解教育のメソッド)

- ◆ More time to speak with students, games to do with the students.
- ◆ The game was fun and had broken the ice among the shy Japanese students.
- ◆ ゲームが楽しく、恥ずかしがり屋な日本の生徒にとってのアイスブレイキングになった。
- ◆ I would have enjoyed talking more with the students and may be more freely. I feel that we barely had enough time for conversation. I enjoyed.
- ◆ It would have been better if there was more time to talk with the students. As it was, I feel like the junior high student got to see foreigners, but that's all. Because there was so little time I feel like it's wrong to call this an "International Exchange" as there was very little exchange that happened.
- ◆ ゆっくりと余裕を持ち会話を楽しめたかったです。
- ◆ グループの自由交流時間が短すぎた。あまりしゃべれなかった。
- ◆ このような中学校との交流を長い時間行ったらいいと思います。

中学生との交流の時間が短いと感じた留学生が多く、中学校の生徒・保護者とも共通する意見である。中学校生徒が積極的に話そうとしない理由として異文化体験の不足と日本人的態度を指摘するとともに、外国人に慣れ交流を促進する方策として自由な会話時間の設定と緊張が軽減される形式での交流やペンパル制度を留学生は提案している。しかし、交流会での自由な交流時間の設定が中学校生徒の異文化コミュニケーション能力の発揮につながるかには疑問が残る。質問設定をすることで具体的な話題が提供され、発話が促される。日本語が堪能な留学生に対しても中学校生徒や保護者が口を閉ざしがちであった現実からも異文化接触における障壁は言語能力のみではないことが明らかである。異文化接触において、どう会話を初め、どうコミュニケーションすべきかが分からないことが現実的課題であり、教育現場において意図的な異文化接触体験の場を構築し、体験学習をしない限り、生徒がそれらを習得することは困難である。

中学校生徒が14ヶ国出身の言語も文化も多様な留学生と向き合う状況を設定し、自由な対話時間を設けた場合、言語能力、社交性、非言語的コミュニケーション、対人関係の構築能力など、多くの不安要因からコミュニケーションは進まないことが本国際交流会から予測できる。留学生対日本人という二項対立的カテゴリーが常に機能し、言語能力に関わらず異文化性のラベルが関係性を決定づけていた。Zaidman & Malach-Pines(2014)は、Tajfel & Turner(1986)・Jetten & Spears(2004)・Van Knippenberg & Ellemers(1990)らの研究に基づき、自身の所属するグループメンバーとしての帰属意識をもとに人がアイデンティティを構築し、自身をカテゴリー化し、自身の特徴を維持していると論じているが、本国際交流会では、各参加者が持つ帰属意識が明確なカテゴリーを作り、それが行動を決定づけた面もある。異文化間能力形成の課題は中学生側のみではなく留学生側にも提示できる。留学生が異文化に不慣れな中学生が心を開ける対話能力を身に着けることも今後の課題であろう。

結語

今回開催した広島大学短期交換留学プログラム留学生と倉橋中学校との国際交流会は日本の中学校における国際交流会としては大規模で斬新な試みであったと捉えている。倉橋中学校生徒・教職員・保護者・多国籍の交換留学生・大学教員が参加し、画一的でない異文化性を包含する環境での異文化体験は、参加者が世界や外国人について持っていた概念を新しい枠組みで認識し直し、異文化間能力の実質的意味を考える場をもたらした。交流会後に生徒や保護者からあがった、多くの留学生との接触を望む声は、留学生との人としての出会いが異文化をより身近に感じる機会となった成果であり、異文化接触をより体験したいとの意欲の表れである。グローバル社会と切り離すことのできない今日の日本において教育現場で発展させていくべき異文化間教育の課題は多々ある。異文化接触の少ない地方において、留学生がその地域社会で生きる人々の異文化理解を支援する場を構築する

ことも今後の重要課題であろう。留学生と地域社会の人々を「人」として結ぶ場を創り出す挑戦は、今後の「グローバル化支援インターンシップ」における交換留学生インターンの大きな課題となるであろう。実践への挑戦は始まったばかりである。

注

¹ 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSA プログラム」と称する。24ヶ国に渡る64大学とUSAC (University Studies Abroad Consortium)及びUMAP (University Mobility in Asia and the Pacific)の2コンソーシアムと協定を締結している(2014年11月時点)。「HUSA プログラム」に参加している留学生を本稿では「HUSA 留学生」と記載する。

² 経済産業省ホームページ参照。

引用文献

加藤優子 (2009) 「異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究 – 高等教育における異文化トレーニング実践の問題と改善に関する一考察 –」『仁愛大学研究紀要』人間学部編 第8号, pp. 13-21.

経済産業省ホームページ「社会人基礎力」(<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku>) <2014年12月1日アクセス>

林原慎 (2011) 「小学校高学年の国際理解に関する興味・関心に影響を及ぼす要因 – 児童の異文化接触の経験からの検討 –」『異文化間教育』第33号, pp. 98-114.

藩英峰・義永美央子 (2014) 「日本人中学生の異文化受容態度とその関連要因 – 米国・中国との比較から –」『異文化間教育』40号, pp.138-149.

溝上由紀・柴田昇 (2009) 『異文化理解』と外国語教育 – 教養教育の一形態として –」愛知江南短期大学紀要 38, pp. 31-42.

Hibbins, Ray, and Sally borbasi, 'Building friendship through a cross-cultural mentoring program', *International Journal of Intercultural Relations*, 37 (2013) : 523-535.

Sobré-Denton, Mariam, Rob Carlsen, Veronica Gruel, 'Opening doors, opening minds: A cosmopolitan pedagogical framework to assess learning for global competency in Chicago's underserved communities', *International Journal of Intercultural Relations*, 40 (2014): 141-153.

Zaidman, Nurit, Ayala Malach-Pines, 'Stereotypes in bicultural global teams', *International Journal of Intercultural Relations*, 40 (2014) : 99-112.

謝辞

呉市立倉橋中学校での国際交流会にご協力下さった倉橋中学校及び地域関係者の皆様、当日ご支援下さった呉市の関係者の皆様に感謝の意を表する。